

都市白書の全体像

開催日：平成19年7月14日

平尾光司

私の報告のほうに入らせていただきます。この『川崎都市白書』というのは300ページ近い分厚いものでございます。何を明らかにして、これから何を残された研究課題とするのかということをご報告させていただきたいと思っております。お手元にありますプリントアウトをご参照いただきながらお話を進めたいと思っております。

この『川崎都市白書』は「未来創造都市・川崎」という副題がついてございます。わたくしどもはこの三年間の研究を通じて、川崎モデルという世界に提供できる都市のモデルに成り得るのではないかと感じております。その可能性をどのように認識するのか、その可能性を実現していくうえで課題は何なのかということをご報告させていただきたいということでございます。まずその問題の捉え方です。現在の世界の経済社会の発展というのは、従来は国と国との競争、国家間の競争であったわけですが、日本とアメリカ、あるいは日本とドイツという国家間の競争は続いているわけです。しかし最近、あきらかになってきたことは、国家間の競争のベースは、都市レベルあるいは地域レベルの競争であるということです。つまりはその国の中の都市が先進的な競争力を持っているかが国の競争力を決める、そういう時代に入ってきた。マイケルポーターの言葉ですけれども、都市地域の競争力がない限り、国の競争力は生まれてこない。つまりアメリカ経済が1980年代まで衰退を続けて回復してきたのは、シリコンバレー、シアトル、オースチンという都市が、従来のデトロイト、ピッツバーグ、伝統的な都市に代わって発展して、成長してきた。ヨーロッパもまったく同じでございまして、しかしそのミクロ的な都市、地域の繁栄発展成長の牽引力とエネルギーはどこからくるといって、地域のイノベーション力、それは新しい価値を創造していく力、生産性を上げていく力ということになります。イノベーションが地域をベースにして展開していく。その地域のイノベーションを誰が担っていくかということ、それは産業・企業あるいはその産業・企業で働いている、あるいはそういう企業に協力する多様なクリエイティブクラスという人的資源です。最近話題になっていますリチャード・フロリダのクリエイティブクラスという本があります。そしてそのような企業クリエイティブクラスを方向付けしていく都市、地域のビジョナリーといわれる地域のリーダーがいるということですね。その地域の発展の方向を見通してそのための具体的な戦略を策定して実行していくビジョナリー

が、経済界あるいは行政あるいは大学というところにたくさんいて、そういうところでシリコンバレーが作られたわけですし、シアトルも作られたわけです。工業100年の川崎の歴史をふりかえってみますと、まさに川崎もビジョナリーによって作られたといえると思います。

最近、「七転び八起き」という映画ができました。川崎の臨海部を作った浅野総一郎という事業家、起業家の伝記の映画です。また、川崎に東芝の前身の東京電機を作ったですね、田中さんと味の素の鈴木さんとか昭和電工の森さんとかそういう方が、ビジョンを持った事業家がこの川崎に産業をつくっていた。そしてまた、川崎が市になる前の町長、本田さんが川崎を工業都市にするために工業用水を作り、道路を作っていた。そういう人たちの協力、ビジョナリーまさに川崎のビジョナリーがいて、現在の川崎がある。じゃあどういう点で川崎の可能性を考えていくのか。先ほど申しましたように、国と国との競争というのは、その国のリードする都市・地域の国際競争です。したがって、日本の高度成長をさせてきたあるいはこれまでの産業構造の成長を支えてきた川崎市の競争力をあきらかにするという事は、日本の未来の競争力、可能性をあきらかにすることじゃないかというのが第一の問題意識です。つまり、工業化時代の物的生産力の競争から知的イノベーションの競争の時代になる。それを支えるような人材、企業間のネットワークあるいは産学官の連携の仕組み、そういったものをまとめたイノベーションクラスターというのはどういうふう形成されるのかということを知りたい。

ちょうど今年が、川崎市に1907年横浜製糖と東京電気、東芝の前身ができて100年でございます。まさに日本が本格的な工業化のスタートをきった。ちょっと余談になりますけれど、100年前の、東京電機とか横浜製糖がうまれるまえの川崎の産業を調べてみたんですけど、実に皆さんも想像もつかないんですね。麦藁帽です。この地域の農家で取れた麦わらをですね、帽子に。しかもこれはアメリカに大量に川崎から輸出されたんですね。輸出産業だったんですね。この100年間歴史的な発展過程で、非常に価値のある歴史的な資産のことを経済学ではレガシーアセットといいますけれども、これがまさに川崎がひじょうに豊富に蓄積されている。その現代的な評価をすることが必要ではないかと思います。それからそういった結果、川崎市には臨海部の素材産業、それから内陸部の電機産業、それから中堅・中小企業を中心とする、加工産業の集積があります。私どもは海外の先進的都市といわれている都市を30都市くらい調査いたしましたけれども、この素材産業と組み立て産業、それから中堅・中小これを三点セットで持っている都市は世界では川崎しかないとうことを確信しています。これが川崎の力でありまさにレガシーアセットだと考えております。同時にこの産業集積に人材が集積している。そしてまた新しいインキュベーションのケイエスピーをはじめとして、日本で一番活発なインキュベーション施設を持っているということです。

われわれの課題といたしましては、この貴重な都市資産を活用して、21世紀型の環境都市成長を実現していく街をどのように作っていくか、そういう条件を明らかにしていきたいということでございます。そして川崎をですね、「イノベーション・ホットスポット」これはアメリカのイノベーション政策をバルミサーノというIBMの会長が中心となって、政・官・民・学がいっしょになってですね、アメリカのイノベーション政策を2005年に提言しました。このバルミサーノレポートによるとアメリカでは、「イノベーション・ホットスポット」をこれからシリコンバレー以外に12作ると提言しております。我々の研究は、「イノベーション・ホットスポット」として

川崎の可能性を明らかにしたいということです。

都市白書の構成につきましては、お手元にありますように、6章構成になっております。これは私どもの各ユニットの研究成果です。それから第5章には川崎市の産業政策都市政策のこれまでの評価、それから第6章が川崎の都市構造と都市理論によるモデルによる発展モデルという構成になっております。

ポイントだけ、申し上げます。我々が明らかにしたかったのは川崎の強み、川崎市の都市としての頑健さです。東京都と横浜市の間でありながら、サンドイッチにならずに独自の都市システムを持っている。経済的ストロー効果といいますけれども、小さな町が大きな町に挟まれていると経済力をストローで吸い上げられているようにとられてしまう。それで、東京と横浜の間であってストロー効果というのを強烈に川崎は受けているはずなんです。川崎市はそれにもかかわらず、衛星都市になっていない。最近のラゾーナの調査によりますと、ラゾーナに車で来ている人たちの実に75%は横浜市民と東京都民だという統計が報告されています。逆ストロー効果が、ラゾーナ川崎ではたらいてきている。もうひとつが、川崎市の経済成長力。これはのちほど田中教授のほうからお話がありますが、川崎市は高度成長のリーディング都市であったわけですが、しかし85年から2000年までですね日本全体の経済成長率を川崎は下回りましたが、2001年以降また日本を上回る成長力を取り戻してきている。それがなぜかという適応力、アダプタビリティであり、転換力であるということですね。ここに書いてあるとおり、震災、公害、石油危機、バブル崩壊こういった戦後の環境の激変の中で川崎市の転換が進んできている。そして素材型とサービス型、素材型を新しい高付加価値の経済産業転換してきている。そういう転換能力、そして歴史的な資産をもっているということで、それは先ほど申し上げたことにつながります。

民間資本によるインフラストックというのは、わざわざ『都市白書』では赤ぬきで民間資本といたしましたのは、川崎のインフラについては国の投資が少ない。これは鉄道にしてもですね、港湾にしてもですね、すべて民間資本によって行われてきた。これをですね、やはり今後、新しい税制なり、地方財政の中で、インフラストックの財源的な裏づけを考えなくてはいけないのではないかと。これは川崎市産業振興財団の君嶋理事長に教えていただいたことですが、川崎は全国のガソリン税の13%を納めている。しかし道路予算は、日本全体の1%以下しかつけられていないという現状です。地方分権におけるインフラ投資の財源強化が強く望まれます。

次に川崎の課題です。川崎の製造拠点、臨海部の高度な高付加価値素材産業に転換している拠点を維持しつつ、研究開発型の都市に移っていくことです。しかしそういった開発センターに移行していくためには、海外の先進的な都市と比較すると、まだ企業間、産学官の多様なネットワークが不足しているのではないかと。そして、研究開発拠点が企業内に閉じ込められている。クローズドシステムになっています。世界の先進的イノベーション都市では、大企業、中堅・中小ベンチャーで枠を超えたオープンイノベーション活動というのは活発ですね。

それから知的開発拠点の大学は、川崎市に多く存在していますけれども、しかし世界クラスの知的拠点がいないんじゃないかと。これをどういうふうに作っていくか、それから交通ネットワークのあるいは生活文化インフラの充実も課題です。それから先ほど申しましたように、クリエイティブシティとなっていくための人材が集まってくるような仕組みづくりというのが必要ではなからうか。そういう意味でわれわれの『都市白書』のポイントはどのように川崎の頑健さ、適応

力、レガシーセットの長所に関して今後展開していくかということでございます。

川崎市のクラスターとして捉えている京浜クラスター、京浜臨海部の東西に走る横のクラスター集積と、多摩川のクラスター、これが川崎の中でT字型にですね結ばれているという強みを絵に書いたわけでございます。そして将来のイメージとしては高度な多様性を持った都市です。有名なJ.ジェイコブスという学者がいますけれども、彼女が都市というものが、多様性を包み込む、それによって集積が集積を呼ぶ成長力を持つんだということを言っております。川崎には、これからその多様性を包んでいくシステムをどうつくっていくかということで、将来像として、こういった新しい知的な創造都市になっていく条件を明らかにしました。のちほど望月教授の報告にございますが、イノベーション力とか将来の都市の競争力のランキングをつくるとアメリカでは、ロサンゼルスでもニューヨークでもなくシアトルがトップです。シアトルは、今から10年前からハイテク産業のイノベーション都市になるという戦略をブルッキングス研究所に委託しました。シアトルがボーイングの城下町あるいはウェアハウザーというですね材木企業への依存からハイテク・シティに転換していくための戦略を作りました。そのときにブルッキングスの提案をベースにして、10年かけて競争力トップの都市になりました。我々としては企業の枠を超えた、ネットワークをベースにしたクリエイティブクラスが暮らしやすい街づくりと、それから、持続可能なサステイナブルなテクノ・エコシティとしてシアトルは都市づくりに成功し、マイクロ・ソフト、アマゾン、スターバックス等の企業が成長しています。ポスト、地球温暖化対策のこれからの世界の課題に先進的に対応するモデル都市になっていく可能性をもっているのではないかと評価されています。常に川崎市ではエコタウンとかエココンビナートとかございますけれども、今後は、臨海部だけではなく川崎市全体をエコシティにしていく、そしてそのエコシティにしていくというのは、単に物を使わないとか、消費を減らすといった、消極的な環境都市ではなくてテクノ、最先端の技術を持ったという意味を込めているのでございます。そういう意味で世界のモデル都市として将来像を考えられるのではないかと期待いたします。

次の画面はですね、先ほどの話に加えて、しかしその都市のコミュニティというのはですね、図の左の企業の産業活動の高度化によって支えられてない限り絵に描いた餅になるというのです。大量生産の機能は中国・アジアに移して、マザー工業機能、研究開発機能、それから臨海部内陸部の企業が展開して、高付加価値生産機能とそれから先端産業技術機能を企業が持つていくことによって、川崎モデルというのができてそれが世界の他の先進的な都市、トップクラスの都市に共存した競争力のある差別化のベースになりつつあります。川崎が独自の競争力を持つのではないかとござります。そして、そのためのですね、課題は、都市のシステム、都市のプレーヤー、参加者、それから都市の基盤プラットフォーム、これを作っていないといけない。田中先生の報告にあります、川崎市は政令都市の中では独自の構造を持っていますけれども、この構造をさらに強めていくことでそれによって世界の頭脳センターになっていく。それからネットワーク、市内に川崎駅前、溝口駅前のいろいろな都市拠点がありますけれども、その拠点をもっとつなげていくネットワーク機能を強化していく。市内のネットワーク機能とそれから羽田空港の国際化に対応して、川崎市、特に臨海部を日本のハブとして世界につながっていくことを支える交通ネットワークのインフラの強化が重要で。たとえば南武線の高規格化ということがござりますけれども、われわれも後ほど宮本先生の報告で多摩シリコンバレーという構想を出しま

す。南武線がですね、私もいつも登戸から川崎駅まで待ち時間を入れて40分もかかっている、普通に走れば20分です。また、臨海部のいろんな鉄道のネットワークがありますけれども、これはみんな分断されている。このアクセスを羽田につなげて多様性を持った国内外から多様な人材を、企業を受け入れる。世界のいろんな都市を訪問して川崎を紹介いたします。アメリカで一番わかりやすいのが、東芝、味の素の生まれた都市はアピールしますが、デルコンピュータの日本本社、トイザラスの本社があるよということ、「あ、川崎はそういうところか」とアメリカでは非常にわかりやすく川崎のイメージというのは伝わります。アジアの起業家村は、アジアでは理解されています。NEDO、新エネルギー開発機構が川崎にあるというのは大きな意味があります。内外の研究者が年間一万人以上、世界の頭脳がNEDOを訪問しております。内外の人材、プレーンが、川崎に集まる仕組みを強化していく必要があります。

川崎科学技術サロンという新しい組織が2007年に作られました。こういったものをNOP的なものに広げていく、さらに人材・情報の流動性を高めていくことが必要ではなかろうかということでございます。あとはですね、各論はそれぞれの先生方からお話があると思います。最後に、私が申し上げたいのは都市経営力の強化ということでございます。

都市の行政の効率化ということが言われていましたけれども、やはりこれからはですね、行政から経営に、都市経営に転換していく視点が必要かと思えます。その都市の経営に多様な民間の主体が参加してくる。世界の先進的な都市を見ていると、そういった多様な主体が街づくりに基礎の政策成形から参加してきているということを感じております。それから、都市ガバナンス、それから都市政策、産業政策、環境政策というのをですね、機動性のあるかたちで発展させていくことと、それからですね、世界へ川崎の発信力、シティセールスをもっともっと強めるべきではないかということでございます。私共は世界の主要都市を訪問して、先程申し上げた「川崎モデル」の紹介をすると大変興味をもたれます。

そして最後にですね、世界クラスの創造都市といいますと夢物語に聞こえるかもしれませんが。ボルチモアという町があります。これは川崎市の姉妹都市ですが、川崎と同じような産業構造、重化学工業の町で港湾都市でありました。それは今、すっかりバイオ産業の、アメリカでトップの町になってきている。また昔は、ボルチモアに観光客というのはほとんどこなかった。これが今は年間二千万人の観光客がボルチモアに来るようになってきています。ボルチモア市の市長がミケランジェロ、みなさんご存知のルネッサンスの大芸術家の彼の言葉を引用して、「リスクというのは目標を高く設定して、達成できないことではなくて、目標を低く設定してそれを簡単に達成することだ」、ボルチモア市は世界のトップのバイオ産業都市になるんだという目標を10年ほど前に設定しました。ボルチモア市は町中に「コンフィデンス、確信、自信」というスローガンが掲げてありまして、自信を持って世界トップを目指そうという努力をしています。そして、ボルチモア市の臨海部は公害の工場地帯で、人も寄りつかなかったですが、今ここに一千万人が観光客が来ているような町にかわってきております。

ちょっと時間が押してきて恐縮ですが、私の全体的な総括のご挨拶とご報告とさせていただきます。